

腹臥位・座位変換式バギーの開発

訓練科 杉浦 真紀

小児科 長澤 哲郎、大越 優美

<はじめに>

重症心身障害児にとって腹臥位姿勢は呼吸管理や緊張コントロールのため重要であるが姿勢変換時のリスクは高く、腹臥位装置自体も大きくて保管場所の確保に困ることが多い。

今回、座位保持装置を利用して新しい発想で腹臥位装置を考案したので報告する。

<目的>

- 1、体幹低緊張と下肢拘縮のある重症心身障害児の安全な姿勢変換方法の確立
- 2、腹臥位リスク管理と成長対応が容易で収納場所を取らない腹臥位装置の開発

症例：5才女兒、周産期障害後遺症 重度痙直型四肢麻痺



後弓反張頻回

呼吸循環不安定

頸部体幹低緊張

胃瘻

喉頭気管分離

左凸側彎

骨盤前傾 股屈曲 膝伸展の拘縮

<課題>

- 1、低緊張による腹臥位変換時の介護
困難と関節損傷の可能性
- 2、急激な支持面変化に誘発される
緊張亢進
- 3、リスク管理のため、ナースステー
ション近くでの腹臥位実施が必要
- 4、「高這い位」対応の腹臥位装置は
高さが必要であり収納場所を取る

<対策>

頭部・体幹を支える**薄型腹臥位装置**に側臥位で体を入れて安定させ装置ごと移動、ゆっくり腹臥位になることで緊張亢進を防ぐ。両足は固定する。

座位保持装置付きバギーの背もたれ部分を脱着式とし、**薄型腹臥位装置**を取り付け、**腹臥位のまま移動**。成長期身長増加に対応できる構造⁶

<腹臥位座位変換バギー>

薄型腹臥位装置

着脱式背シート



ウレタン多層足台

前傾・後傾機能、テーブル、
胸受け、あご受け付き

<腹臥位姿勢変換の実際>

1, 薄型腹臥位装置に側臥位で入れる。



2, 側臥位のまま、装置ごと移動



両足固定

3, バギー座面上でゆっくり腹臥位にする



ベッドに戻る際は逆の順序で行う

<結果>

- 1、薄型腹臥位装置を用いた体位変換方法によって、病棟での介助が統一された。
- 2、体位変換中の筋緊張亢進が著減した。
- 3、腹臥位での移動が可能となり、観察とリスク管理がしやすくなった。
- 4、腹臥位装置を薄型にしたため新たな保管場所が不要となった。
- 5、成長に伴う調整が容易であった。

< 考察 >

薄型腹臥位装置を用いた姿勢変換方法の統一は**複数の介護者によるケアの均質化と継続性**に貢献すると考えられた。

薄型腹臥位装置を用いた連続した体位変換と移動方法は**常に安定した支持基底面を提供**することができたため緊張亢進防止に有効であったと考えられた。

腹臥位移動が安全かつ容易になることで排痰効果のみならず多様な刺激を得る機会を得た。